

中部の

エネルギーを
築いた

人々

日本の電力王・福沢桃介

PART1 中部経済圏の礎を築いた福沢桃介 — その1

中部の電気事業人の連載を始めるにあたり、最初に福沢桃介を取り上げ紹介したい。

福沢桃介は、1868(明治1)年に埼玉県比企郡吉見町で生まれ、1938(昭和13)年東京の自宅で生涯を閉じた。今年(2018年)は生誕140年、没後70年になる。

波乱万丈の人生を過ごし“日本の電力王”と呼ばれた桃介を、今後、機会を設け数回にわたり掲載していきたい。今回は、中部経済圏の礎を築いたことを如実に記した名古屋市千種区覚王山にある「福沢桃介先生之碑」の全文を紹介し、その前半の生涯と業績について述べる。



福沢桃介先生の追憶碑
(名古屋市千種区覚王山日泰寺舍利殿)

福沢桃介追憶碑

名古屋市千種区覚王山にある日泰寺舍利殿の入口東側に「福沢桃介先生之碑」が建てられている。この碑には桃介の生涯を略述し、その功績さらに中部経済圏を築いた偉大な足跡と仁徳を偲んで記述されている。

その全文は

「福沢桃介君は天縦の奇才にして其国家社会に貢献したる事業は卓抜広大明治大正の経済史に特筆大書せらるべきものなり

君は埼玉県人にして慶應義塾に学び其前半生は東京を舞台として飛揚したるに係らず後半生の気力精神は全く中部日本に向かって費やされ君の遺業によりて恵沢を受くることもっとも多きは中部日本なるは不思議の遭遇と云わざる可からず

福沢君が中部日本に関心を懐くに至りしは明治42年名古屋電灯会社に関係したるに始まる当時の電灯会社は灯火の供給を以て主要なる営業とし且つ主として火力に依頼せしが福沢君はまず方針を一変し或は電力に或は電熱

に電力利用の境域を拡大するに勉め一転して広く化学工業を誘起し而して之に依じて電源を増大せんことを図り各所に水路を開き堰堤を築きて水力の利用に勉め此の如くして増大したる電力を送致するがために大送電線を作り再転して幾他の電力会社を増設す

尾張信濃の溪谷を千万年間黙々として啞流し茫々として盲走したる河水は之より灯火電熱となりて幾百万の家と戸々に光明と温暖を与え電力となりて大小幾百千の工業を誘起するに至る斯くて春水の四沢に満つるが如く名古屋の人口は増加して日本第三の都会となり

後年此の電力は更に大阪地方に侵入して其の工業に至大なる衝動を興ふるに至る数十年前誰か信尾の溪水に此の如き偉力を蔵するを知らんや唯だ福沢君の慧眼瞻気のみ能く此啞流盲走の水を駆使して電力文明を開展す

中部日本に於て今福沢君を追憶して其の鴻業を礼讃するの聲盛なるもの偶然にあらざるなり茲に下出民義君の唱道により福沢君の旧

友が力を合して碑を建て君を記念せんとするに會うて名古屋地方に大造ある君の事績を書して以て記となす」

この碑は、桃介が没してから2年後の1940(昭和15)年11月に、下出民義(明治から大正時代にかけて名古屋に近代産業を興しリーダーとして活躍、また東邦学園の創立者として

知られる)が発起世話人となり、当時の大同電力・東邦電力・名古屋鉄道・矢作製鉄・大同製鋼の5社が協賛した。

撰文は、「二千五百年史」の著者で歴史学者の竹腰興三郎、書は、戦後、書道芸術員創立時の発起人の一人である野本白雲である。

その前半の生涯と年譜

桃介が1908(明治41)年、電気事業に携わり中部経済圏で活躍するまで、彼の前半の生涯を年譜により簡単に述べたい。

(1) 福沢家の養子

福沢桃介は、岩崎紀一郎、さだの2男として生まれ、地元の川越中学から慶応義塾に入学した。そして福沢諭吉の養子として1876(明治19)年入籍し、岩崎から福沢に姓を変え、翌年アメリカに留学した。

アメリカでは、ニューヨークのイーストマン・ビジネスカレッジ商業専門学校、ボストンにあるダンマー・アカデミーに学んだ。その後、ペンシルバニア鉄道会社に入社し、日本で将来基幹産業になるであろう鉄道事業の実務を体験した。

(2) 実業界での浮沈

1879(明治22年)アメリカから帰国すると、福沢諭吉2女の房と結婚した。そして北海道炭鉱鉄道株に入社し実業界に入った。東京支店に勤務していたころ、売炭実績を上げ、愛知商会社長の下出民義と50万tの販売契約を締結し、両社の結びつきが強まった。

しかし1884(明治27)年に肺結核に罹り、会社を休職して療養生活に入った。このときに株取引を始め、1千円を1年間で10万円にして、兜町の飛将軍と云われた。その後、それを資本に事業展開を図っていくのであるが、このことなどが生涯相場師としての虚像が付きまとうことになった。



下出民義
福沢桃介の事業上の協力者
で、東邦学園の創立者

株で得た資金で三井系の王子製紙の株を買って取締役に就任した。これは当時三井銀行専務理事だった中上川彦次郎が、桃介の身の上を心配してのことであったが、間もなく辞職してしまった。この王子製紙の取締役に任中に丸三商会を設立した。丸三商会は、ロシアがシベリヤから満州へ鉄道を施設するときの枕木を販売する下請けの会社で、北海道の材木を輸出した。しかしこの事業も資金の調達ができず倒産した。このとき日本銀行に勤め、活躍できずにいた松永安左衛門を引き抜いて片腕とし、松永も懐刀として働いた。これ以降、生涯にわたる事業の二人三脚が始まった。

1891(明治34)年、福沢諭吉が没した。諭吉は、9人の子福者で家庭第一主義であった。また、株取引を嫌い、桃介の行状が不愉快で、桃介にしかりつけたこともあった。このようなこともあり、桃介は株取引で当時3百万円を超える金を手にしたといわれたが、株で得た金はいつ失敗して無一文になるか分らないと思い、健康を回復すると株から手を引き実業界で生きることを決意した。そして井上角五郎が専務理事をしていた北海道炭鉱鉄道に再度入社した。ここでは、井上専務の秘書として政財界の重鎮と顔をつなぎ、国際的な経済感覚を身に付けた。そして得意の英語と生来の雄弁で、明治38年、英国から百万ポンド、約1千万円の外債導入に成功し、我が国の外資導入の嚆矢となった。

(3) 政友会代議士として1期3年

桃介の異変ともいえる一事に、1912(明治45)年、千葉県から政友会候補者として衆議院議員に立候補した。流暢でウイットの富んだ演説は好評を博し、最高得票を得て当選し、華々しく政界入りを果たした。ここでは、政府の予算の不適切性やある企業と政界の癒着

を取り上げて国会で大演説をぶちあげた。このときに党の長老に説得されて秘密会の席で議場での発言を取り消した。この行動で桃介に糾弾を期待していた正義派の人たちから“桃介というやつはなんという軽薄な野郎だ”と不評を買った。このようなこともあって、政界のからくりの煩わしさに嫌気がさし、政界財界の期待を担って政界入りした桃介であったが、1期3年で代議士を辞し、再び政界に戻ることはなかった。

今回は、桃介と電気事業との関わりから、彼が携わった中部の主な企業について述べたい。なお、桃介の年譜は次のとおりである。



福澤桃介大理石像
1932(昭和7年)に来日したイタリア人彫刻家(ベシー)が制作した大理石胸像。鵜沼にある貞照寺で保管されていたものを、矢作製鉄(本社ロビーに設置)を経て、中部電力が譲り受け、現在でんきの科学館で展示されている。

年号	福澤桃介年譜
明治1年	1868 埼玉県比企郡吉見町で生まれる
明治16年	1873 川越中学3年生から慶応義塾に入学
明治19年	1876 福沢家と養子縁組
明治20年	1877 アメリカに留学(2年8ヶ月滞在)
明治22年	1879 北海道炭鉱鉄道に入社
明治27年	1884 結核で療養生活
明治28年	1885 株取引で千円の元手を10万円
明治31年	1888 王子製紙取締役就任、利根川水力発起人総代
明治32年	1889 京橋に丸三商店設立(約1年後閉店)
明治34年	1891 福沢諭吉歿す 北海道炭鉱鉄道に再入社(約5年余勤務)
明治41年	1908 博福電気軌道設立発起人、豊橋電気(株)取締役就任
明治43年	1910 名古屋電灯(株)取締役、常務取締役に就任(約半年後辞任)
明治45年	1912 千葉県選出の代議士に当選(政友会公認・1期3年)
大正2年	1913 再度名古屋電灯(株)常務、翌年取締役社長に就任
大正3年	1914 愛知電気鉄道株式会社取締役社長に就任
大正5年	1917 電気製鋼所設立、翌年取締役社長に就任
大正7年	1918 東海電極製造(株)設立、相談役に就任 木曾電気製鉄(株)設立、取締役社長に就任
大正8年	1919 矢作水力(株)設立、相談役に就任(社長：長男の福沢駒吉) 北海道電気鉄道(株)取締役社長に就任(大正11年、愛知電気鉄道に合併) 大阪送電(株)設立、取締役社長に就任
大正9年	1920 大同電力(株)社長に就任(木曾電気興業、日本電力、大阪送電を合併)
大正10年	1921 関西電気(株)社長に就任、12月辞任(名古屋電灯、関西水力電気が合併) 大同製鋼(株)を設立、取締役社長に就任
大正11年	1922 東邦電力(株)相談役に就任(関西電気、九州電灯鉄道を合併・本社を東京に移転) 東邦瓦斯を設立(名古屋瓦斯を合併) 北恵那鉄道(株)取締役社長に就任
大正15年	1926 天竜川電力(株)取締役社長に就任 帝国劇場(株)取締役会長就任 東京に別荘「桃水荘」を建設、東京に移転
昭和3年	1928 実業界から引退
昭和6年	1931 貞照寺地鎮祭に臨席
昭和13年	1938 東京の渋谷本邸で死去

(寺澤安正)